



## 巻 頭 言

### CD の音と現色偏光

小 瀬 輝 次\*

2度目の定年を迎えたこの4月から、少年時代に戻ってクラシック音楽をCDプレイヤーで楽しんでいる。昭和10年代、今では死語になった蓄音機で聴いて憶えた曲をCDで聴くと、こんなにもベースが活躍していたのかとか、こんな音が入っていたのかとか、新しい発見に驚いたり感心したりしている。

私の場合、蓄音機からCDへと途中LPを抜いて一気に50年飛んでしまったので上記の印象はとくに強いのかもしれない。

昭和20年代、私は現色偏光の計算を行なった時期がある。今日の計算機ならば当時の3年分の計算量は数分で片付いてしまうに違いない。しかし手計算で得られた結果は精度は少々甘く、また思わぬところが抜けているのかもしれないが、それなりに現色偏光について多くのことを教えてくれた。CDを聴いて前記の印象を持ったあとすぐ思い付いたのがSPとCDとは何か手計算と電子計算機の関係に似てはいないかということであった。

CDに親しんだお陰で、CDの基板であるポリカーボネート板(PC板)の歪をエリプソメーターで歪による複屈折分布を一点一点測定し、2次元的に表示、評価していることを知った。

技術の進歩につれて、眼では追従できなくなった事象も多々あるが、一方2次元パターンの認識と評価では今なお眼は最高のセンサーである分野も残っている。にもかかわらず、工業生産社会では視知覚の曖昧さ、さらに悪いことには、これがコストの最も高くつく人間に装着されているために眼の使用はとかく敬遠され、代って光電変換素子が愛用されている。時代の趨勢だからといってレーザー光と光電変換素子だけで物を見るのではなく肉眼で物を見ることも忘れてはならない。たまにはレーザー光を白色光に、光電変換素子を眼に代えて物を見ることをお勧めする。PC板の場合うまく工夫すると美しい現色偏光のパターンが見えるのかもしれない。

古いなどと言われても、かつて現色偏光の美しい色に魅せられた者の一人としては、色の定量化は確かに難しい点もあるが、それ自身物理的意味をもつ場合もあるので、アメダスの表示のように色は単なる数値の見やすさのための記号にすぎないと考えられるのはたいへん寂しい気がするからである。

CDの音楽とだいぶ離れてしまったが、音楽を聴きながら巻頭言に何を書こうかと考えを巡らすのも隠居の特権とご寛容願いたい。